4　その他の行事

1毎年一月一日　初詣で　　素住台大八洲神社
2同　二月末日　組合通常総会　四地区組合公民館を巡回して開催
3同　二月中　　鎮魂祭　　素住台畜魂碑前で開催
4同　三月中　　組合員と組合の懇談会　四地区組合公民館で開催
5同十一月末　　組合集団検診　組合事務所前レントゲン車で実施

二十　むすび（偕に拓き共に築く）

終戦前の満洲開拓時代に誕生した元大八洲開拓団が団員の全面共同のもとに建設事業を推進してきたことをはじめ、終戦後の痛々しい避難の道中も集団で助け合いながら修羅場をくぐる非情極まる遠い道のりの間に、傷ついた婦女子を抱えながら漸く新京に辿り着いて一年近い収容所生活を送った頃も佐藤団長の統率により、中でも、割合元気な団員家族は味噌、醤油、濁酒等の即製醸造から甘酒、豆芽菜作り、葱作りとできるものなら何にでも手をかけ、生産する者もこれを売り歩く者も一丸となり、多くの病弱者に少しでも栄養のある温かい食物を求め、飢えの苦しみと危い生命を共同の力で取り止めてきた。

このように開拓団の建設から悲惨な避難生活の中で共同による大きい成果を体験し、協同の大切さを経験したことにより、団員一人一人の心と体に刻み込まれた共同意識はやがて組合員の信念へと育った。そして、再出発した国内開拓でも水害の洗礼を受けさらに共同体は強固になり、大八洲の特異な開拓集団が生まれたように思う。制度で縛ったり、組織の押し付けによって共同が成り立つ場合もあるが、それでは本質の共同とは言えない。共同の効果が現れるまでには時間を要するから当座の役に立たないことが多い。そのうち共同は崩れて長続きしないのが往々である。しかし、長年の共同生活の中で甘いも辛いも様々な環境の中で培われてきた組合員の共同の思いが一つになってできた大八洲開拓の共同体は、組織の押し付けでも誰から強要されたものでもないところに持続性があると考えている。

入植してから集団生活、共同作業、共同経営を十年にわたって続けているうち、間もない連続水害を皮切りに度重なる大水害で大八洲は水害の開拓として県下にも名を知られた程

で、農業生産は一向に目に見えない。したがって生活費に追われ、組合員の借入金は償還はおろか累積するばかりで、昭和三十年頃には不振組合として経営の立て直しが開拓行政の中で計画され、そして、当事者の組合員が抱いた不安以上に周囲の方や関係機関に大変な心配をかけ、また御配慮を賜った。

不振原因は全面共同を何時までも続けているから農業生産が伸びないとの共同経営の批判とも聞こえる忠告の声があった。共同作業・共同経営は作業能率も生産性も低い一般的な面は大八洲といえども同じでもっともな意見である。

しかしながら、毎年少しづつでも開墾面積を広げ、来年こそはと期待をかけて無理を押して作付しても秋には一握りもなく流されてしまい、元も子も失ってしまう水害の繰り返しではいくら大八洲開拓といえども根気よくしがみついているのが村の人からも不思議がられた程であった。

そのような中で、個人経営に移したならば、開拓を止めて何処へでも行けというに同じで、開拓に定着する者は一人もいなかっただろう。ましてや入植した四十戸のうち十八戸の女世帯があり、家族を亡くした独身の男性や両親を亡くした孤児もいるので、そうした集団が生き延びるには全面共同に頼る他なかった。そして、一人残らず開拓に定着するには、一致して共同・協力の姿勢でことに当たる他道がないと考えてきた。

菅生沼囲繞堤防も完成し、大井沢台地の開墾もほぼ終え、入植地の条件で異なっているものの生活と経営の最低の根拠を造り得た時点で組合員は一様の基盤の上に立ち、昭和三十年の秋頃から一斉に個人経営にスタートして全面共同に区切りをつけた。そして、今日まで、開拓地を離れる者や組合から離脱する者は一員としていなかったこの大八洲開拓は運命共同体的集団とも言えると思っている。個人経営以降の四十年の道のりには、家庭の事情並びに経営の技術や能力の個人差、経営業種によっての好不況、後継者問題等さまざまな関係で、離農、転職、経営の転換、規模の縮小または拡大と長年の間に各人各様の変遷を経てきたが、長年の共同時代に培われてきた家族的人間関係の保持、そして組合員と組合との密接な関係は根底から崩れることはなかった。

流作地区は個人経営後も水害を被った。幾度の災害にも他地区の組合員は我先に駆け付け、乳牛の避難をはじめ農業資材や家財の移動および水害の後片付け等全面的に協力、応援を続けてきた。とくに乳牛の避難、移動を短時間に行うには慣れている組合畜産農家の手助けがなくては決して果たせる仕事ではない。

各地区の酪農家は普段においても牧草の蒔き付けおよび飼料作物のサイロ詰めの時節には共同作業、農機具の共同利用

等により労働力の足りない農家に協力してきた。こうした酪農およびトラクター等（任意組合）の組織活動も共同意識の現れである。

住宅、畜舎等の失火の場合も火災と聞いた組合員は馳せ参じ、建物の大抵の損傷は職業柄および入植来身に付けた技術を以て即座に屋根でも壁でも修繕して、何処が燃えたか解らないように手当てをしてしまう。大きい被害であれば警察の現場検証の終り次第取り壊し、後片付けもして、翌日には次の仕事が何時でも始められるように綺麗になっている状況を見て、地元の人も手際の早いのに驚いている。こうした不時の出来事は勿論病気や不幸の場合も、組合員の経営、経済的問題それに家庭内問題にも組合は相談に乗り出し善後策に当たる。このように組合員の懐に踏み込むようなことは他の開拓でも普通は考えられない大八洲開拓特殊の一面である。

こうしたことは、満洲開拓以来長年にわたる一世達組合員の長い体験から生まれた組合員の家族的連帯意識そして信頼感によるもので、それが二世組合員にも素直に受け継がれた結果の現れである

その二世達の協力と努力によって大八洲開拓も五十年の今日まで小さい組織の組合が持ちこたえることができたのである。しかしながら、戦後各地の多くの開拓者がその地域農業の先導役として、また、日本農業の原動力となった画期的時代もあったが、開拓五十年の今日ではその数も限られてきたように、大八洲開拓の発展を見た一時期の農業経営は最近来その影も薄くなりつつあり、当時の活況を取り戻すにはいかにすべきかが問われている重大な時期に五十周年を迎えたのである。長いと思った開拓も組合員の経営努力によって早くも五十年を歩むことができたが、この先五十年後の入植百年の大八洲開拓の姿はどうなっているだろうか。開拓者には関心深い話題であるが、入植当時五十年後の大八洲開拓の現在の姿を誰もが予想できなかったと同じく、農業に展望がない情勢の中で、五十年先の姿はおろか、十年向こうを予測することもできないが、反面また夢があり、やり甲斐を感じるものでもある。

開拓事業は三代かからなくては成功しないと言われているように、大八洲開拓もこれからの五十年は農業経営の継承次代を迎えた三世代の若い青年の双肩にかかっており、その動向如何によっては開拓百年も決して夢ではないとも思われるのである。

それには、苦しい困ったどれ程に大変な時でも希望を捨てず諦めないで、前向きに開拓の道を歩んで、先人が発揮してきた開拓本来の共同協力の心を次代の青年も受け継ぐことが大八洲開拓の維持発展に欠くことのできない要素であると考えている。

大八洲開拓は少数の成功者より全ての組合員がなるべく平等に人間としての生活と真の幸福を享受できることを願い、そして一人でも多くの者がその願いを達成することを最終目標にして、満洲開拓でも果たせなかった佐藤団長の理念を戦後の開拓で成し遂げるべく再入植し、生活も経営も全面共同の力で長い歳月をかけて組合員生活の基礎を築いてきたのである。

普段は烏合の衆とも思える集団である組合員もいざという時には即座に心も力も結集して事に当たり、幾多の危機も乗り越えてきた。苦節五十年の歴史は大八洲開拓には何ものにも代え難い大きい財産であると考えている。

昭和十四年に北満の一角で大八洲開拓団が発足してから六十有余年の伝統である組合員の一家族的つながり、同志の助け合いと連帯感のもとに生まれた共同意識と組合組織が一体となる共同協力体制が保たれる限り、大八洲開拓の未来と夢の灯は消えることのないことを確信しているものである。

佐藤初代組合長が開拓記念碑に表象したように「偕に拓き共に築く」と故人が開拓に一貫して指導実践してきた共同協力の教訓と固い意思を体して二十一世紀に向って新しい農業を開拓していくことを後継の若い諸君に託したいと考えている。そして、名実ともに大八洲開拓の真価が決定する組合と組合員ともにもっとも重大な大八洲の真の開拓が今日から始まろうとしている。三世代の新しい時代が幕明ける入植五十周年を大八洲は迎えたということを最後に銘記しておきたい。